

しまね学校図書館活用コンクール 取組の概要

学校名 安来市立第二中学校

1 応募部門 ※ 応募する部門に○を付けてください。

(○) 読書活動部門

() 学校図書館を活用した授業部門

2 実践のねらい

本校では朝読書を継続して行っているが、生徒の読書傾向を見てみると、軽読書への偏りが見られる。そこで、読書環境を整え、読書への働きかけをおこなうことで、生徒の読書の質を高めたい。そして、じっくりと読書に取り組むことで、様々な知識や多様な価値観を学ぶなかで、心豊かな生徒を育てたい。

3 実践の概要（学校図書館とのかかわりがわかるように記すこと。）

A 読書環境の整備

1 読書の場を設定する

(1) 朝読書の実施

毎朝、始業前の10分間を朝読書の時間とし、教員も生徒と一緒に読書を行っている。数年前から継続している取組で、学習や部活動等で多忙な生徒達にとって、本と向き合う時間を確保するうえで大きな意味をもっている。

(2) 開館時間の設定

学校司書が勤務中は常に開館し、生徒が自由に入出入りして、本を探したり、読んだりできるようにしている。図書館の位置が教室に隣接していることもあり、休み時間ごとに生徒が入出入りし、本に親しんでいる。

2 書籍の選択の幅を広げる

(1) 公共図書館からの借り入れ

限られた学校予算の中から、生徒が興味をもち、読み応えのある作品を購入することを心がける。また、近隣の公共図書館との連携をはかり、借り入れをおこなうことで、生徒により多くの作品を提供する。本校では今年度すでに、1,720冊の本を借り入れている。多種多様な作品に直に触れることで、読書意欲を刺激し、選書の幅を広げ、本を選ぶ目を養うことをねらいとしている。

B 読書への働きかけ

1 国語科授業での取組

(1) 想像力を養い心を耕す取組 **ストーリーテリング** → 添付資料 1

読書をおこなうために必要なのは、言葉のもつ意味や感情をイメージする力である。幼い頃からテレビや映画のような視覚からの刺激に囲まれて生活している生徒達にとって、活字をながめて自分の頭の中で物語世界を構築していくという作業は困難がともなう。このことが、最近の生徒の読書離れの一因であると考えられる。そこで、本校では、生徒達のイメージ力を高め想像力を培うことをねらいとして、ストーリーテリングを実施している。

平成21年度までは、地域ボランティア2名が、朝読書の時間を利用して、各教室をまわってストーリーテリングを行っていた。2名が7クラスを回るの、生徒達から考えると月に1回程度、つまり、年に8話程度を聞く計算になる。おはなしが始まると、生徒達は真剣に耳を傾け、物語の世界に引き込まれていくのだが、場所が教室であるため、遅刻ぎりぎりて来た生徒のためになかなか静かな雰囲気になりにくかったり、目の前の荷物に気が散ったりして集中しにくかった時もあった。また、朝読書の時間が10分と設定されているので、短めな話を選ばねばならず、生徒に聞かせたいと思う話があっても取り上げることができなかった。

平成22年度は、朝のストーリーテリングに加えて、秋の読書週間に本格的な「ストーリーテリング」の会を設けた。机や椅子をとりはらい、部屋を暗くしてろうそくのあかりをとすことで、集中力も高まりおはなしの世界に入りやすくなった。また、時間にあまり制約がないので、少し長めの物語を含む三つの話によってプログラムを構成することができた。ストーリーテリングは語り手と聞き手の双方の響きあい善し悪しが決まる。聞き手が集中すれば語り手もより力を発揮することができる。その結果、生徒の集中度が高まり、しっかりとお話の世界にひたって物語を堪能している様子が感じられた。そこで、平成23年度は、朝のストーリーテリングをとりやめ、学期ごとに「ストーリーテリング」の会を設けて、年間で9話を集中して聞くことができるように改善した。

(2) 読書の質を高める取組 味見読書 → 添付資料 2

今年度当初、朝読書の時間に生徒がどんな本を読んでいるか観察していると、自宅から持ってきた本を読んでいる生徒が圧倒的に多かった。そのほとんどがアニメを小説化した作品、ドラマの原作、ケイタイ小説、ジュニア向け恋愛小説、流行のホラー小説などで、手に取りやすいものに偏り、読み応えのある本を選んでいる生徒はわずかであった。本校には読書に苦手意識をもつ生徒も多く、本は表紙の親しみやすさや文字の大きさなどで選んでいると語る生徒もいる。そこで、味見読書を行い、ふだん手に取らない本に触れさせることで、読書の幅を広げる試みを行った。

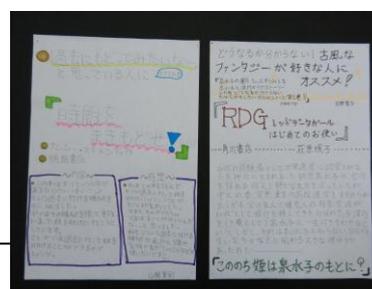
味見読書は今までも他校で実践されているが、生徒の実態に合わせ、かつ読み応えのあるものを選ぶことに力を入れた。また、一冊の味見に充てる時間が短いので、はじめから読むと面白い場面まで到達せずに終わってしまう可能性が高くなる。そこで、その作品の面白さが分かる部分を読ませるように、作品によって読み始めるページを変えて、そこまでのあらすじをまとめたメモをつけた。

(資料No.3)

読後のメモプリントに、「続きが気になる度」として☆マークに色をぬる欄を設けたところ、『二分間の冒険』（岡田淳・偕成社）や、「おれがあいつであいつがおれで」（山中恒・旺文社）に高い評価をしたものが多かった。どの生徒も1冊は気になる本を見つけたようだった。実際に本を借りて読んだ生徒の数は多くはなかったが、今までに手をつけたことのない分野に挑戦した生徒もいた。

(3) 読書の幅を広げる取組 本の紹介文を書く

夏休みに読んだ本についてポスターを作成し、友達に紹介した。多くの生徒たちが、身近な友人の紹介する本に興味を持ち、手にとって読んでいた。



2 図書委員会の活動

(1) Reading コンテスト

読んだ本の冊数を競い合い、学校全体で本を読むことを習慣づけることをねらいとしている。子どもの読書週間にあわせておこない、連休中の読書を奨励するねらいもある。このコンテストは、クラス対抗で期間中に読んだ本の冊数を合計して、一人当たりの平均冊数を競ったものである。

上位3位までを入賞とし、全校集会で表彰した。

(2) 本を読んでポイントゲット

図書館蔵書の利用を促進するために、司書が中心になって行った取組である。本を一冊借りるとシールが一枚もらえ、クラスごとの表に貼って集めていくという方法をとった。図書館の隣に教室がある2年生が一番たくさん本を借りて、一位になり、司書が作成した手作り葉を2年生全員に贈った。



(3) ブックトーク → 添付資料 3

本校では毎年11月に文化祭を行っている。そのときに、図書委員会の活動として、ブックトークを行い、全校生徒に読書を奨励している。今年度は、文化祭のテーマ「扉〜かけがえのない仲間とともに終わることのない友情の詩を歌おう」にちなんで、「友情のカタチ」というタイトルでブックトークを行った。まず図書委員全員が「友情」にまつわる作品を一冊ずつ選んで読み、その本のどんなところが「友情」と関わるのか、どんな感想をもったかをまとめて持ち寄り、その中から数冊を選んで、関わりを考えながらつないで紹介していくようシナリオを作った。当日は3年生がステージで発表をおこない、全校生徒がその発表を聞いた。今回は「友情」という興味ある内容であったことと、生徒が選んだ本で生徒の手によっておこなったブックトークだったということがあり、これらの本はその後多くの生徒が読みついでいた。

(4) 必読図書選定 → 添付資料4

生徒の読書の質を高めるために有効な手段が「必読図書」読破への取組である。しかし、本校ではまだ「必読図書」を選定していないため、生徒の中から有志を募って、その生徒と一緒に「必読図書」を選定することにした。これは、現在進行中の取組である。

2学期の終わりにプロジェクトメンバーを募集したところ、読書好きな生徒が数名集まった。冬休みを利用して何冊かの本を読ませ、3学期の始業前に会合をもって候補を絞っている。今後候補の見直しを行って1月下旬までには30冊を「必読図書」として決定する予定である。そして、決定したら、読了者を表彰するなどのルールを設け、キャンペーンを行う予定である。

4 実践の成果

ただ見ているだけで情報が入ってくるテレビ等の映像メディアは受け身であるが、本を読むという行為は自分の意志を必要とする。最近の傾向でもあるが、本校でもやはり、読む生徒と読まない生徒とのひらきは大きかった。そして、朝読書があるのでしぼしぼ読んでいる生徒が選ぶのは、展開がはやい、情景描写の少ない、刺激の強い、読みやすい本である。

そんな生徒に少しでも本の面白さを知って欲しい、読書の質を高め幅を広げて欲しいと願って、年間をとおしてさまざまな取組を行ってきた。

「ストーリーテリング」のねらいとしては、読書に欠かせない想像力を養うことももちろんだが、それ以前に生徒の生きる力を培うということもねらっている。これに関しては、即効性を図ることはできないが、私自身が生徒を前に語る時に、物語の世界に没頭している様子をひしひしと感じて、この体験がこの先彼らの人生の中で、何らかの影響を与えていくだろうことを確信している。

「味見読書」については、紹介した本を読破した生徒があまりいなかったのが残念である。しかし、少数の生徒ではあるが、今まで読んだことのないジャンルの本に興味をもち、その面白さに気づいたという点では成果があったといえるだろう。

図書委員会の取組である「Reading コンテスト」と「本を読んでポイントゲット」については、質より量をねらった取組だった。クラス対抗にしているので個人差を埋めることもできなかつたし、読まれる本の質を高めることもできなかつた。それでも、読書に対する機運を高め、読書に関心の高い生徒にとっては楽しいイベントになっていたと思う。2年生では、この取組をきっかけに少しずつ本を読む生徒が増えてきているのは確かである。特に男子のなかで、友達の口コミで「NO6」などのYA文庫がよく読まれるようになったのはこの取組以後であろう。「息子が読書をするようになった」と喜ぶ保護者の声も聞いている。

「本の紹介文を書く」「ブックトーク」の取組からは、やはり同世代からの紹介は生徒の読書意欲を高めるということがわかる。友達や図書委員が紹介した本は、その後貸し出しが続き、かなりの生徒が読破した。その利点を活用して考えたのが、現在、生徒の協力を得て行っている「必読図書選定」である。この取組には二つねらいがある。ひとつは、先に記したように、生徒が選定に関わることで、読書意欲を高めることである。もうひとつは、教師が読ませたい本を選定委員に読ませて、興味を持たせることである。少しでも多くの生徒がそれらの本に興味をもってくれることを期待している。

さまざまな取組を通して思うのは、生徒の読書意欲を高めたり、読書の質を高めたりするためには、特効薬はないということである。特に中学生ともなり、ある程度自分の世界をもつようになれば、紹介してもすぐその本に飛びつくことは少ない。だからこそ、さまざまな方法を試していくことが必要であると考える。それを繰り返すなかで、少しずつ読書に興味を持つ生徒が増えたり、こちらの紹介する本に興味を持ってくれたりするようになるのだろう。これからも生徒の読書をより豊かで楽しいものにするよう継続した働きかけを行っていきたい。

※A4判で1～2枚にまとめる。